

# 「魚服記」の素材

—「甲賀三郎」をめぐる—

青木京子

## 〔抄録〕

「魚服記」の素材は、伝説「甲賀三郎」も重要な役割を果たしている。

まず、「魚服記」には〈蛇〉の表記が四回も認められ、滝や湖の主とされる〈水神〉との関わりは深い。この〈水神〉を辿っていくと、大森郁之助氏の指摘による「八郎大明神」が想起され、そこから「甲賀三郎」があぶり出される。この題名から、「三郎」と八郎のきこりの兄弟の〈三郎〉が踏襲されているように思われる。

「甲賀三郎窟物語」には、〈諏訪〉という表記が見え、母と夫の伯父の〈不義密通〉が描出される。〈諏訪〉は主人公の呼称〈スワ〉に、〈不義密通〉は、〈スワ〉と父との〈近親相姦〉に踏襲されている可能性は強い。〈スワ〉が滝に飛び込むシーン等は、伝説「龍になった甲賀三郎」に借材しているように思われる。

キーワード…大蛇、甲賀三郎、諏訪、甲賀三郎窟物語、龍になった甲賀三郎（伝説）

一 はじめに

二 「甲賀三郎窟物語」との比較

三 「甲賀三郎」の伝説との比較

四 〈スワ〉という呼称

五 〈水神〉と〈大蛇〉

六 結びに

一 はじめに

太宰治の「魚服記」の典拠についてはこれまでさまざまに指摘されてきている。

たとえば、鳥井邦朗氏は、「『魚服記』の女主人公スワが水中の鮒になるという発想は、『雨月物語』から得たということになる。」とし、

「魚服記」末尾の、鮎になったスワを描く筆致」は、井伏鱒二氏の「山椒魚」の「水中の眼が影響をおよぼしている」としている。

長篠康一郎氏は、第二節、「三郎と八郎といふきこりの兄弟」の挿話について、「八郎」の物語は「十和田湖と八郎潟にまつわる東北地方の伝説からとったものと考えてさしつかえあるまい。但し、兄の三郎は太宰の創作である点、特に留意する必要がある」としている。

大森郁之助氏も、「魚服記」の作中話は十和田湖伝説に兄三郎を付加しただけでなく、伝説の後段、修験者に追われて八郎潟に移る件と田沢湖の主田鶴子との恋の件とを、除去してもいる。」とし、「柳田監修・民俗学研究所編『民俗学辞典』」に、「十和田湖と類似の由来をもつ八郎大明神が各地に伝えられている旨を記し」（「甲賀三郎」）、その他にも（八郎）に纏わる様々なヴァリエーションの伝説が伝わっているとしている。

久保喬氏は、『太宰治の青春碑』<sup>4</sup>で、柳田国男の『山の人生』（郷土研究社、大正一五年一月）の巻頭の短い一文「山に埋もれたる人生ある事」が踏まえられているとされ、山内祥史氏は、「山に埋もれたる人生ある事」の冒頭部分の他に、九州の「ある山奥の村に生れ」た女性が、「大きな滝の上の小路を、親子三人で通るときに、もう死なうちや無いかと、三人の身体を、帯で一つに縛り付けて、高い樹の間から、淵を目掛けて飛込んだ」話や、「山中の生活」や「伝説世界への憧憬」、「昔語りへの郷愁」などに関する記述はほとんど『山の人生』から材を取っているとしている。

このように、「魚服記」は前掲のような作品の借材によって成立し

ていることは理解出来る。がしかしそれ以外にも多くの材料が用意されているのではなからうか。

大森氏が指摘した「甲賀三郎」には多くの伝説が存在し、「すわのほんち兼家」や「甲賀三郎」<sup>7</sup>、「甲賀三郎窟物語」<sup>8</sup>が見られるが、これらには（八郎）だけではなく、〈諏訪〉という記述や〈三郎〉という呼称も見られ、男女の情話等も叙述されている。

本稿では、「諏訪縁起」として広く親しまれた「甲賀三郎」の中でも、特に太宰が取材したと思われる「甲賀三郎窟物語」との関係を中心に、検証していきたいと思う。

## 二 「甲賀三郎窟物語」との比較

昭和八年三月、「海豹」創刊号に発表された「魚服記」は、太宰の「前期」に位置づけられる作品の中でも、特に多くの研究のあるものの一つである。改めて確認すれば、典拠についても柳田国男の『山の人生』から借材されていることが指摘されてきている。

前述のように、長篠康一郎氏は「魚服記」の「八郎」は「十和田湖と八郎潟にまつわる東北地方の伝説からとったもの」とし、大森郁之助氏もその指摘の他に、柳田監修・民俗学研究所編『民俗学辞典』に、「十和田湖と類似の由来をもつ八郎大明神が各地に伝えられ」、それが「甲賀三郎」であるとの記述が見られると指摘されている。

では、「甲賀三郎」とはどういうものであろうか。

『神道集説話の成立』<sup>9</sup>によると、「甲賀三郎」には膨大な伝説があ

り、それらを概括すると、近江や諏訪に纏わる（蛇体変身譚）であるということが理解できる。そしてそれらには（蛇）に纏わる話や「諏訪明神」の記述も見られ、「魚服記」と関連が深いように思われる。

そこで、「甲賀三郎」に纏わる文献、例えば伝説（昔話も含む）などが考えられるが、それらと比較してみても、その取材の有無を検証してみることにはしたい。

太宰治が近松作品や義太夫について興味を注いでいたということ、野原一夫氏の『太宰治 結婚と恋愛』（一九八九年一月 新潮社）の中で、太宰の弘前高等学校時代の級友、三浦正次の発言を通して明らかになっている。

本棚には近松門左衛門の本や浄瑠璃全集などがぎっしり詰まっていたが、太宰は三浦に、「浄瑠璃は耳で聴く芸術だから読んでいただけではピンとこないね。こんど義太夫を習おうかと思っている」といったという。そしてその後まもなく竹本咲栄のもとに通いはじめたという。

義太夫に関しては、作品『津軽』に、

学校からの帰りには、義太夫の女師匠の家へ立ち寄つて、さいしよは朝顔日記であらうか、何が何やら、いまはことごとく忘れてしまつたけれども、野崎村、壺坂、それから紙治など一とほり當時は覚え込んでゐたのである。

と叙述されている。

ここで、太宰治が学生時代に義太夫を習い、それを典拠にしていたということは、太宰が戦後に著述した「おさん」が、浄瑠璃本『心中

天網島』だけではなく、義太夫「心中紙屋治兵衛」からも受容しているということは以前論じたことがある。<sup>10)</sup>

まず、太宰が眼にした可能性がいちばん高いのは、「甲賀三郎窟物語」であると思われるので、これを中心に比較していきたい。

『義太夫年表』（昭和五十四年二月 八木書店）を調べてみると、享保二十年（乙卯）九月に、大坂 竹本座で、「甲賀三郎窟物語」が記され、一方「竹田出雲浄瑠璃集」（作者は竹田出雲、文耕堂の合作 明治三年六月 博文堂）も、活字本として存在するので、この「甲賀三郎窟物語」が関わっている可能性は高い。

そこで、この「甲賀三郎窟物語」について考察してみよう。

活字本「甲賀三郎窟物語」（前出）「竹田出雲浄瑠璃集」、関連の深い箇所を掲出してみることにする。

昔語を今爰に、謹み白すも恐れながら、中央の此御劔は、天孫瓊々杵尊より、諏訪明神に賜はりし、神代の昔事問へば、甲賀の氏も古へは、諏訪と名のりし遠祖武南方命と申すは、大己貴の御子にて、猛く勇める勲功に、螢火の輝く神、蠅聲悪神邪神を切従へ、此葦原を創業し、天孫に譲り奉り、諏訪の郡を領るよしして信濃の国に住み給ふ、諏訪大明神是なり、されば我治功此国を、天孫に譲り與ふると、末世を謀る智ありとて、智仁勇の三徳の、其智に是を比へつゝ、代々家に持伝へ、苗字も諏訪と名乗しを、甲賀と改め代へたるは、聖武皇帝の御宇かとよ（一）

のう御臺、ひよんな事が出来申した、と苦り切たる目に涙、と計り仰せられては、のう櫛の戸、合点が参らぬ、如何やうなひよんな事、聞かせ給へ、と摺り寄り給へば、云ふも敢ない兼家は、鬼神に掠られ、山で相果て召さつたは、エイ、鬼神とは何の鬼神、（略）其長一丈余りの鬼神、角はかほく眼は月日の如く成しが、微塵になさんと飛びかゝる、兼家少とも臆し給はず、飛び違へむづと組み、鬼神の真中刺し通さんとし給へば、俄に悪風毒気を吹き揚げ、首を掴んで雲に乗り、虚空遙かに揚ると見えし、御手も足もごだぐに、忽ち果敢なく成り給ふ、のうく語るも胸痛や、思ひ出すも身が縮む、（二）

## 道行妹背の姿絵

終に語らねば未だ知るまいが、那の姉は我が真実の子では無い、汝が為にも母は一所、種変りの兄弟、一六年以前の忘れもせぬ三月、我も浪人して此国に、少しの知辺を頼んで来た其の折柄、姉が真実の親五助殿、死去めされた後、死なれた媼が五つに成る、子を介抱しさまよふ、幸ひの事と媒介あつて入簪し、後の五助と異名に呼ばれ、前の五助殿に成代つて姉を養育、渡世大事と働けども仕つけぬ烟業、汝が出来る噂が手塞がる、彌彌身上うがなに成る、其を苦に病でか煩（略）現在夫の伯父は親、枕交さば不義と云ひ、畜名を取事、推量して給も親子の衆、夫に別れ便りなき、如何に此身なればとて、（略）思ひ寄らぬ伯父御の恋慕、御当惑

の程尤とは、存ずれども、察する所是迄は畢竟密事、最早露頭を憚らず、斯程に深き御執心、強て背かせ給ひなば、お家の乱れ破れの基、假令御名は汚る、とも、御大切な若君、波風立てず守立てなば、自らお家相続、是御母儀の、不義に似て不義にあらざる道理、（略）黙れ櫛の戸、心を汚さず身を穢さず、口で云ふても不義は不義、（略）一世の契亡き母の、紀念に遺す胤変り、兄弟三人夫三人、不思議に廻り近江路や、筑摩の神の恵ある（四）

（傍線は筆者、以下同じ）

「甲賀三郎窟物語」の（二）には、「甲賀の氏も古へは、諏訪と名のり」、「苗字も諏訪と名乗」とあり、「諏訪」の呼称が見え、「大己貴の御子」で、「猛く勇める勲功」に、「螢火の輝」き、「蠅聲悪神邪神を切従」えるとの記述も見える。「神」を思わせる「諏訪大明神」が表出されている。

（二）にも、「毒気を吹き揚げ、首を掴んで雲に乗り、虚空遙かに揚ると見え」る「諏訪大明神」の超越ぶりが描かれ、（四）の「道行妹背の姿絵」には、母親お浜の夫である五助が病没した後、簪を迎えるが、再び病で倒れ、その間、夫の伯父と枕を交してしまふ、すなわち近親の立場での「不義密通」である。

ここでは、「魚服記」の「水神」を思わせる「大蛇」の記述と、主人公の「スワ」の呼称、第三節のスワと父親の「近親相姦」に通じているように思われる。父親と娘、母と夫の伯父の違いはみられるもの、どちらも「不義密通」を扱った挿話であり、共通項といえる。特に、「魚服記」においては二人の「近親相姦」は重要なテーマだと思

われるので、これは注目すべき点といえる。

この「甲賀三郎窟物語」の「不義密通」と、この第三節の山の異空間での〈近親相姦〉は、全く関係ではありえない。

「魚服記」の「三郎と八郎」兄弟の〈八郎〉に関して、長篠康一郎氏は、「八郎」の物語は『十和田湖と八郎潟』にまつわる東北地方の伝説からとったもの」と指摘されたが、〈八郎〉は「十和田湖と八郎潟にまつわる東北地方の伝説」だけでなく「諏訪」の〈八郎大明神〉の〈八郎〉をも想定していたように思われる。同時に長篠氏は、「兄の三郎は太宰の創作である点、特に留意する必要がある」と指摘されているが、この〈三郎〉は、単なる太宰の創作ではなく、「甲賀三郎」の〈三郎〉から借材したように思われる。

次に、寛永元年四月、近松門左衛門作とされる「甲賀三郎」(「近松全集」第七巻 大正一五年一二月)について比較してみる。これは、近江の国、甲賀左衛門兼連という武士の子、太郎、次郎、三郎兼家の武勇譚で、特に、三郎兼家の鬼退治の話が中心となって展開している。ここには器量自慢の女郎が「小蛇」となり変化する記述が見られ、「君の御めをかすめすぢならぬ恋をして」となり、「ふぎのせうこ」などの表現が見られるが、それは〈不義密通〉の話ではなく、遊女との情交を扱っている。半部中納言の娘で「変化にかどはかされて行方知れず」の「若葉」は「遊女」の身の上となり、重要な役割を担う女性ではあるが、〈不義密通〉は描かれず、単なる遊女としての情交が描かれているだけである。

「すわのほんち兼家」は、本曲は若狭守の正本で、正保三年正月の

刊行のものであり、それは、「敏達天皇の御宇に近江国の甲賀三郎といふ武勇に秀でた武士が、腹心の郎党竹綱を従へて、若狭の大掛山に妖怪退治に赴き、或は美女となり或は美少年と化けて現れる変化を、伝家の角の月弓神通の矢を以て退治したが、同行の若狭の人権の左右衛門の為に岩窟中に置きざりにされる。兼家はそれから岩窟の大穴を七日七夜落ちつづけて地獄に出で、一百三十六地獄を廻つて、遂に観世音の利益と名鏡の威徳とによつて身命を全うして再び故郷に帰る。この間に竹綱は左衛門を討つて主の怒を晴らして居たので、兼家は家を一丸に譲り、諏訪の神殿に飛び入つて諏訪明神と祀られる」という深山での鬼神退治の話である。これは「有名な甲賀伝説を主材としてゐる」もので、後の「甲賀三郎」の戯曲の原拠をなすものだとされている。しかし、ここには〈不義密通〉は記されず、都九条院の乙姫を助ける話が描かれている。従つて、「魚服記」は「諏訪本地兼家」を第一に借材したという可能性は少ない。

このように「魚服記」は、「甲賀三郎」でも、「すわのほんち兼家」でもなく、「甲賀三郎窟物語」を材として構想された可能性が強い。

### 三 「甲賀三郎」の伝説との比較

柳田国男は山崎千束という仮名で『郷土研究』(大正五年一月 第三巻十号)誌上に、「甲賀三郎の話」の小論を挙げているが、昭和一五年一〇月の『文学』八巻十号には、「甲賀三郎の話」の論攷を発表、「十和田湖と類似の由来をもつ八郎大明神が各地に伝えられてゐる」

とし、これが「甲賀三郎」だとしている。柳田国男がその中で取り挙げている、諏訪縁起の諸本の中でも最も古いとされる「諏訪大明神御本地」の梗概を掲出してみる。

それは、「甲賀三郎の兄の悪意によつて、蓼科山中の深い穴に入て還ること能はず、其のま、地底の国々を廻歴して久しい年月を重ねた後、大蛇の姿になつて帰着し、終りに諏訪の大神と祭られたといふ、信じべからざる事蹟を説いた」ものだといわれている。この諏訪縁起の諸本は、『神道集説話の成立』<sup>1)</sup>の第一章、「諏訪縁起・甲賀三郎譚の源流——その話形をめぐつて——」によると、「主人公郷の近江方面とも深くかかわり、主に近畿以西に伝承される兼家系のテキストと主人公が神と示現した信州方面を中心に近畿以東において伝承された諏訪系のものに大別される」と叙述され、又、多くの諸本が伝わっていることも記されている。

このように、「甲賀三郎」には膨大な諸本と考証研究があり、内容も少しずつ変化して伝わっているので、太宰治が見た可能性のある作品の特定は難しい。しかし、成立年代はかなり違うが、口碑としての甲賀三郎譚も多く見受けられる。そこで、特に「魚服記」、第二節の挿話に近似しているものを掲出してみる。三郎を涙ながらに呼び、又呼び返されるシーンや、第四節でスワが滝に飛び込むシーンは、諏訪湖の伝説「龍になった甲賀三郎」の、「甲賀の三郎」<sup>2)</sup>が最も近いので、本文と比較してみる。

（「魚服記」本文 第二節）

むかしのことを思ひ出してゐたのである。いつか父親がスワを抱

いて炭窯の番をしながら語つてくれたが、それは、三郎と八郎といふきこりの兄弟があつて、弟の八郎が或る日、谷川でやまべといふさかなを取つて家へ持つて来たが、兄の三郎がまだ山からかへらぬうちに其のさかなをまづ一匹焼いてたべた。食つてみるとおいしかつた。二匹三匹とたべてもやめられないで、たうとうみんな食つてしまつた。さうするとのどが乾いて乾いてたまらなくなつた。井戸の水をすつかりのんで了つて、村はづれの川端へ走つて行つて、又水をのんだ。のんでるうちに、体中へぶつぶつと鱗が吹き出た。三郎があとからかけつけた時には、八郎はおそろしい大蛇になつて川を泳いでゐた。八郎やあ、と呼ぶと、川の中から大蛇が涙をこぼして、三郎やあ、とこたへた。兄は堤の上から弟は川の中から、八郎やあ、三郎やあ、と泣き泣き呼び合つたけれど、どうする事も出来なかつたのである。

この挿話の前半は、大森郁之助氏の論考のように、津軽にも伝わる「弟がやまべを食べて大蛇と化し川に入つてしまふ昔話」が踏襲されていると思われる。しかし、三郎、八郎兄弟が涙を浮かべて呼び合ふシーンは、立科山のふもとに住んでいた太郎、二郎、三郎兄弟の話、すなわち、「甲賀三郎」の伝説が踏まえられているのではなからうか（「龍になった甲賀三郎」）。

「龍になった甲賀三郎」とは、「太郎、二郎は、末の三郎が里では見かけない美しい妻をもらい、三郎の幸せがねたましく三郎を穴に落とした。三郎は長い間一筋の道をさまよい歩き、村人に美しい姫と会わせてもらった。二人は一緒に暮らし、又長い歳月がすぎた……」

…三郎はふと昔の妻を思いだした」というストーリーの昔話である。「魚服記」と類似している箇所を抽出してみる。

三郎は急に悲しくなつて、はらはらと涙をこぼした。するとお姫さまがそれを見つけ、おどろいて三郎のそばへやってきた。

「三郎！なぜ泣いているの。なにがそんなに悲しいのですか……。」

(略)

長い長い旅をつづけて、三郎はやつと池の上にてた。浅間山のすそ野、真楽寺の大沼の池の中から、三郎は姿を現した。すると、通りかかった子どもたちが、わーっと叫んでにげだした。

「蛇だ。蛇だーっ。」

「おっかないよう。とてつもねえでつけえ龍がでたよう。」

その声におどろいて、自分の姿を水にうつすと、いつのまにか三郎の体は大きな龍にかわつていた。

かわりはてた姿を悲しみ、三郎はしばらくその池のほとりで泣いていたが、それでもなつかしい妻をひとめ見ようと、立科の山をさして池をはいだしていった。ちかずの森まできてふりかえると、自分の尾はまだ大沼の池の中にあつた。立科の双子の池にたどりついて、また後ろをふりかえると、自分の尾は、はるか遠い前山の村里の、高い松の木にかかつていた。しかし、美しい妻の姿も、もといいた家も里も見つからず、三郎はおーおー泣きながら、妻の名をよんで立科の山をめぐつた。しまいには狂つたように、あらあらしく山から山を走つたので、山の木はばさばさどくだけ

て四方にちり、おそろしい地なりが立科山から八ヶ岳までびびきわたつた。三郎の泣きさげぶ声は黒雲をよび、山も谷も深い霧で包んでしまつた。ただ、西の諏訪湖のあたりに一筋の光がさして、そこだけがまぶしいほどに明るく見えた。と、その湖の方から、三郎をよぶ女の声が細く遠く聞えてきた。

三郎はわれにかえつて高く高く首をもたげた。

「おお、あれこそなつかしい妻の声だ。」

三郎は、たちまち黒雲のうずをまきおこし、どどーっと空をとんで、一息に、諏をさしてとび去つていくのだった……。

かつて、三郎を失つた美しい妻は、悲しみのあまり諏訪湖へ身を投げ、そのまま龍になつて湖の底にすんでいたという。

この、三郎を失つた美しい妻が、悲しみのあまり諏訪湖へ身を投げた話は、スワが父親に犯され、悲しみのあまり水に飛び込むシーンと相似している。又、この部分だけでなく、第二節の「三郎八郎兄弟」の挿話の中で、〈三郎〉が泣くシーンも、甲賀の三郎が、かつての妻を思いだし、泣きながら妻の名を呼び、走り回るシーンに重なる。第二節の「三郎八郎」兄弟の挿話は、前掲の大森郁之助氏の論考、「存疑・『魚服記』のフォークロア 太宰治にフォークロアはあるのか」によると、「かつて父親が語つて聞かせてくれた、三郎八郎兄弟の、弟がやまべを食べて大蛇と化し川に入つてしまう昔話である。『魚服記』では特定の地物と結びついていないのでいちおう昔話といつてお

くが、内容的には中心部分が十和田湖の主（のち八郎潟の主）の伝説と類似する。」とし、「この両者の関係ははやく長篠康一郎氏が、この（「魚服記」の）八郎の物語は十和田湖と八郎潟にまつる東北地方の伝説からとつたものと考えてさしつかえあるまい。但し、兄の三郎は太宰の創作である点、特に留意する必要がある。（略）兄と弟の間柄（長篠氏は太宰と長兄の間柄の投影をみる）がどうすることもできない境遇と化した哀話に、独自の意匠を装って置き換えたとみてよいであろう。（昭44・3、虎見書房『人間太宰治の研究Ⅱ』、「伝説の人・義経と太宰治」と喝破しているが、若干の枝葉末節を付け加えると、十和田湖の主の伝説との取材関係はもう少し緩く解してもよいかと思う。」とされている。

たしかに、「魚服記」の「八郎の物語」は、秋田県の八郎潟の「八郎・太郎」の伝説や、「樵の兄弟が岩魚を食べた話」などに相似しているが、他にも踏襲している昔話等があるのではないか。確かに「三郎八郎兄弟」の〈八郎〉と言う名前は、「八郎・太郎」の伝説や、「八郎潟」の「八郎」から由来していることはほぼ間違いないと思われるが、「八郎潟伝説」のどれをみても、〈三郎〉という名の記述は見られない。ただ、「甲賀三郎」の〈三郎〉から由来しているとすれば、話がうまくかみ合う。スワが水に飛び込むシーン、「三郎八郎兄弟」の〈三郎〉の涙、〈大蛇〉への変身など、「魚服記」は「甲賀三郎」の伝説と妙に重なり合う。従って、「魚服記」は「甲賀三郎」の「諏訪」の地を主人公の名前に取り入れ、第二節のきこりの「三郎八郎」の挿話の〈三郎〉もこの「甲賀三郎」の〈三郎〉から借材して、構想した

可能性が高いと判断されるのではないだろうか。

又、「魚服記」後半のスワは〈大蛇〉を喚起させるような設定がなされておき、作品末尾でも〈大蛇〉に変身するような場面がみられる。これも、「甲賀三郎」の、山間で変化する「鬼神」の姿を踏まえ、それを踏襲したと判断されるのである。

#### 四 〈スワ〉という呼称

「魚服記」の主人公、〈スワ〉という名前はどこから由来しているのだろうか。前掲の「甲賀三郎窟物語」の（一）には、前述のように「信濃國」の〈諏訪〉という苗字が表出されているが、ここから踏襲されたのだろうか。一方、「甲賀三郎」にはそのような表記は見られないのであろうか。

「甲賀三郎」の地名に関わる部分を抜き出してみると、次のようになる。

近江ノ國の住人甲賀の三郎兼家。たき口のぢんしよよりつゝと出、やあく／＼それ成は何者ぞ、深更に及びきんにしのぶこと、いづれもあやしきらうせきものとてをさへ

ここでは、〈諏訪〉ではなく、「近江」の表記が見られるので、〈スワ〉という呼称は「甲賀三郎」から由来したものではないことが分かる。というのは、前掲の柳田国男の『郷土研究』、「甲賀三郎の物語」の「二二」の項や、その他の文献によると、「甲賀三郎」は「甲賀」を境として、後に「頼方」系と「兼家」系に分かれ、〈諏訪〉の舞台を中



心にした物語と「近江」を中心としたものに分かれ、〈諏訪〉の表記が見られるのは、〈諏訪〉系のものによるからであるとの記述がみられる。そこから〈スワ〉は、「甲賀三郎」から由来したのではないことがわかる。

又、「諏訪本地兼家」も舞台は「近江」であり、〈諏訪〉の表記は見られない。従って「魚服記」の〈スワ〉という呼称は、「甲賀三郎窟物語」から借材された可能性が高いといえるのである。

## 五 〈水神〉と〈大蛇〉

「魚服記」は山間の「滝」をめぐる作品であるが、第一節から〈水〉に因む表現が頻出している。

まず、第一節では「滝」が六回表出され、「しぶき」(一)、「淵」(二)、「滝壺」(二)、「水面」(一)、「水底」(一)等、合計十三回にも及ぶ(カッコ内は、回数を示す。以下も同様である)。第二節以降についても、まとめてみると次のようになる。

第二節：滝壺(四)、滝(一六)、泳いで(一)、雨(二)、水(三)、しぶき(二)、雲(二)、曇つた日(一)、谷川(二)、井戸(二)、川端(二)、川(二)、涙(一)、泣き(一)、泣いた(二)、みぞれ(一)。

第三節：白いもの(二)、初雪(二)、吹雪(二)、滝(二)。

第四節：滝(二)、水の底(二)、滝壺(二)、淵(二)、泳ぎ(一)、水面(一)、底深く(一)、水(二)。

第二節は二十八回、第三節、四回、第四節、九回になり、第一節の十三回を合わせると合計五十四回になり、短篇約七、五〇〇字の作品にしてはかなりの頻度で掲出されていることに気付く。これは、どういう意味をもつのだろうか。さらに、この作品には〈蛇〉の記述も多いが、〈水〉と〈蛇〉との相関関係はどうなのだろうか。

例えば、第一節では「谷川が岩を噛みつつ流」れ(一)、滝に落ちた都の学生は、「水底へ引きずりこまれ」てしまう。水中の主、〈蛇〉を想起させるような表現である。

第二節でも「三郎と八郎といふきこりの兄弟」の挿話が描かれ、〈大蛇〉が二度も表出され、あたかも〈水神〉であるかのような表現となっている。

「民族民芸双書」の「雨の神」<sup>13</sup>の項によると、日本の各地には、「聖なる池、沼、泉、井戸、淵、滝」があり、「それをめぐる信仰は、民間信仰の重要な部分」をなし、「これに関する伝説は最も主要部分を形成」しているといわれている。そして、水中には、聖なるもの「竜、大蛇、河童」が存在し、「聖なる池、淵」などは「ヌシ」のいるところとされ、〈大蛇〉は水に棲む古来伝承の雨の神、〈水神〉とされていたことがわかる。従って、ここでの〈蛇〉は〈水神〉としての意味合いも強い。特に、単なる〈蛇〉ではなく、〈大蛇〉と記述されていることから、「大きな、〈神〉に近いようなものが喚起される。

第三節でも「鏡のついた紙の財布」、「ぐるぐる巻いた髪の毛へ、父親の土産の浪模様がついたたけながをむす」ぶなど、〈蛇〉を想起させる表現が多用されている。「鏡」も「蛇の目」との相似から「蛇眼」

と呼ばれ、それが転訛して「カガミ」となり、「蛇」を提示するといふ説もある。又、トグロを巻く連想の「ぐるぐる巻いた」や蛇腹模様の「浪」を用い、その出現を予兆するかのようである。

第四節でも〈大蛇〉が再度、続けて二回も掲出されてくる。ここでは、〈水〉と〈蛇〉の多用が目立ち、〈水神〉との関連がかなり深いことがわかる。

では、この〈蛇〉は何を想定して描かれたのだろうか。やはり、前掲のような「甲賀三郎」の〈諏訪大明神〉が根底にあったように思われる。単なる〈蛇〉ではなく〈大蛇〉。それも、人間の姿が〈大蛇〉に変身してくるのである。「甲賀三郎」の〈三郎〉も最後には〈諏訪明神〉として〈諏訪〉の神殿に飛び入ってしまう。ここでは、〈神〉としての意味が付与されてくるのである。

このように、「魚服記」は〈蛇〉をはじめとして、〈三郎〉という呼称、「山深い」背景、種々の「奇特」な出来事の遭遇、〈不義密通〉など、「甲賀三郎」の枠組みや、背景、エピソード、呼称など多くのものを借材して構想していると思われるのである。

## 六 結びに

「魚服記」は柳田国男の『山の人生』をはじめとする多くの借材を基に作品を構築しているが、古来より伝わる「甲賀三郎」もその一つとして重要な役割を果たしているのがわかる。

まず、気がつくのは〈蛇〉の出現である。「魚服記」には特に〈大

蛇〉の表記が四回も認められ、滝や淵等、水中のヌシとされる〈水神〉との関わりは深い。この〈蛇〉に纏わる〈水神〉を辿っていくと、大森郁之介氏の指摘による「十和田湖と類似の由来をもつ八郎大明神」が想起され、そこから「甲賀三郎」が掲出されてくる。

「甲賀三郎」には多くの伝説が派生し、それは、昔話の中にも見出せるが、太宰が借材した可能性のあるものは、口碑として伝承されてきた伝説や、「甲賀三郎」、「甲賀三郎窟物語」等である。口碑としての伝説は勿論であるが、「甲賀三郎」も、大正一五年に「近松全集」として出版されているので、その可能性は強い。

しかし、その背景は、「近江」であり、「魚服記」、第三節のスワと父親の〈近親相姦〉に匹敵する男女間の〈不義密通〉は見られない。そこには、多くの遊女との情交があるのみで、それは〈不義〉とはいえない。従って、太宰は、「甲賀三郎」によって「魚服記」を想定したと言いはない。

では、「甲賀三郎窟物語」はどうだろうか。「甲賀三郎」で描かれていた遊女との交情は、「甲賀三郎窟物語」では母親と夫の伯父との〈不義密通〉になっており、「魚服記」との関わりは深い。さらに、ここには〈諏訪〉の記述が見え、「魚服記」の主人公、〈スワ〉の呼称と照応しているのがわかる。特に、〈不義密通〉は、「魚服記」の中でもかなり重要なテーマの一つであり、注目すべきことである。従って、太宰は「甲賀三郎窟物語」から借材した可能性が高い。

ただ、「魚服記」第二節では、蛇体に変じた「三郎八郎兄弟」が、お互い涙を流して呼び合うシーンがあり、第三節では、〈スワ〉が滝

に飛び込むシーンがみられる。これらは、古来より伝承されてきた昔話の「甲賀三郎」の一シーンに重なる。この「甲賀三郎」には、蛇体に変じた〈三郎〉が、かつての妻を思いだして名前を呼びながら探すシーンがみられ、三郎の妻も、三郎を追って湖に飛び込む。二つのエピソードは微妙に呼応しており、口碑として伝承してきたものを借材した可能性もある。

最後に、第二節、「三郎八郎兄弟」の挿話についての〈三郎〉は、「甲賀三郎」の〈三郎〉によったように思われる。

このように、太宰は、〈蛇体変身〉をはじめ、〈スワ〉と〈三郎〉の呼称や、〈山〉の背景、種々の「奇特」な出来事の遭遇、〈不義密通〉等、「甲賀三郎」に借材して、「魚服記」を構想した可能性は極めて高いように思われる。特に、〈不義密通〉については、「甲賀三郎窟物語」を踏襲したように思われるのである。

### 〔注〕

- (1) 「水のモチーフ」『魚服記』を視座として」(『國文學』昭和五四年七月)
- (2) 長篠康一郎「人間太宰治の研究」Ⅱ(昭44・3、虎見書房「伝説の人・義経と太宰治」)
- (3) 「存疑・『魚服記』のフォークロア―太宰治にフォークロアはあるのか」(『太宰治』2一九八六、洋々社)
- (4) 「群像」第三六卷第七号、昭和五六年七月
- (5) 『太宰治と古典』(『日本文学』昭和六〇年十一月『国文学』解釈と

### 鑑賞

- (6) 黒木勘藏(昭和一八年二月 青磁社)
- (7) 「竹田出雲浄瑠璃集」(作者は竹田出雲、文耕堂の合作 明治三二年六月 博文堂)
- (8) 藤井乙男「近松全集」第七卷 大正一五年二月
- (9) 福田晃 昭和五九年五月 三弥井書店
- (10) 太宰治「おさん」論―『心中天網島』との比較を中心として― 拙稿(『阪神近代文学研究』第3号 二〇〇〇年七月)
- (11) (9)に同じ
- (12) 『日本の民話10 昭和五〇年四月 「信濃の民話」 未来社』
- (13) 高谷重夫「民族民芸双書」(「雨の神―信仰と伝説」一九八四年八月 岩崎美術社)
- (14) 吉野裕子「ものと人間の文化史32」『蛇』(日本の蛇信仰 一九七九年 法政大学出版社)

(あおき きょうこ) 文学研究科国文学専攻博士後期課程

(指導教員…三谷 憲正教授)

二〇〇〇年十月十八日受理